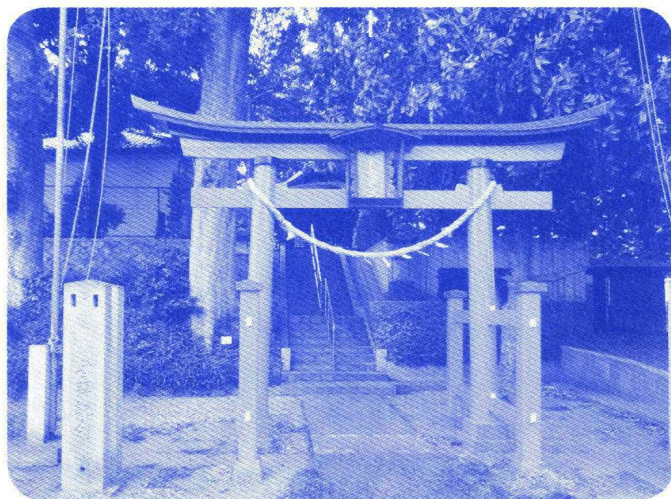


② 岩槻区府内 富士浅間神社

本殿が小高い塚の上にある神社です。自然の丘陵上に浅間神社を勧請した例は深谷市にもあり、岩槻区の富士浅間神社もそのひとつではないでしょうか。

本殿は20年ほど前に建て替えられたとのこと。鳥居の朱色も鮮やかです。



富士浅間神社の鳥居

③ 中央区八王子 浅間神社内

現在の中央区八王子一丁目周辺はかつて「字富士塚」という地名でした。浅間神社があり、本殿の北側に隣接して富士塚があります。塚が作られた時期は不明ですが、少なくとも明治時代にはあったものと思われます。

④ 中央区本町西 与野公園内 スリバチ山

与野公園内のスリバチ山が富士塚であったことは現在あまり知られていないようです。「富士登山五十八度」と「小御嶽 石尊」の二つの石碑が富士塚であったことを示しています。公園内には与野七福神の一、寿老人を祭った天祖神社や小さな弁天社もあります。



与野公園内スリバチ山の石碑

⑤ 北区吉野町 浅間神社

敷地内にはお社のようなものも鳥居もない富士塚ですが、頂上の石碑に「浅間神社」とあります。「狐の穴」

という胎内穴があったという言い伝えがあります。

⑥ 北区吉野町 つつじヶ丘公園内

つつじヶ丘公園内の富士塚は、小さいながらも九つの石碑が立っています。頂上の石碑には「浅間大神」とあり、塚の南側には鳥居も立っています。

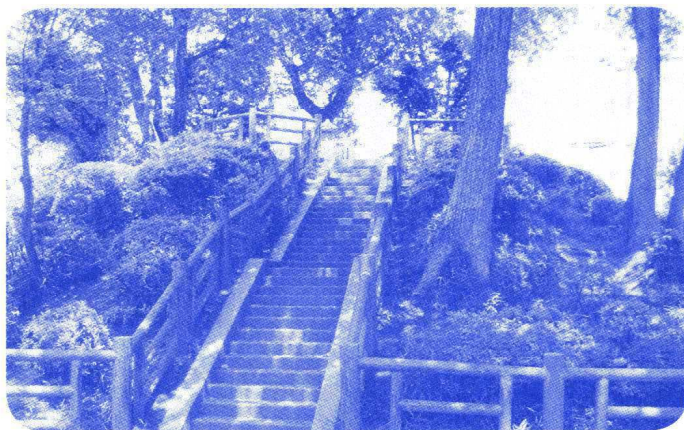
⑦ 大宮区浅間町 浅間山

「浅間祠」という文字が刻まれた石碑が塚の頂上の鉄製の祠に収められています。石碑の正面の文字は山岡鉄舟の筆によるもので、建立は1885（明治18）年です。

⑧ 浦和区大東 大東北児童公園内 塚

大東北児童公園の北側を占める塚は富士塚との言い伝えがあり、付近の人から「お山」と呼ばれていたそうです。

現在、塚の頂上にあるのは庚申塔で、富士塚であるとする石碑などはありません。南北に設けられた階段の途中で平坦なところがあり、塚の中腹を一周する「お中道」の痕跡とも考えられます。



大東北児童公園内の塚

ここで紹介したもののほかにも、市内には多くの富士塚があります。世界遺産への登録により富士山が世界中から注目を集める今、市内の富士塚を訪ね歩き、そこに込められた先人たちの富士山への思いを感じてみてはいかがでしょうか。

【参考文献】

- ・さいたま市文化財調査報告書 第2集 さいたま市の塚調査報告 さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課/編 さいたま市 2002年
- ・さいたま市史料叢書 2 神社明細帳編 さいたま市総務部市政情報課/編 さいたま市 2003年
- ・日本の近世 14 文化の大衆化 竹内 誠/編 中央公論社 1993年



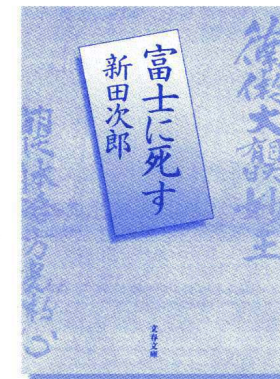
本棚 ぶらり

『富士に死す』

新田次郎著 文藝春秋 2004年

数々の「富士山もの」の小説を描いた新田次郎氏が、江戸時代中期の行者である食行身禄の波瀾に富んだ一生を取り上げた作品です。富士講は身禄の死後、江戸で爆発的に広まりましたが、実際のところ、身禄の生涯の詳細については分かっていません。その謎に包まれた半生を、著者が深い洞察とイメージネーションで鮮やかに表現しています。

小説のクライマックスでは、身禄の“入定”が描かれます。入定とは、食を断ち、水だけで飢えと戦い、静かに死に近づいて行こうとする宗教的自殺のことです。



身禄は、「富士山は浅間大菩薩である。浅間大菩薩の御恵みを受け、恩報感謝の誠を尽くすことによって人間は安定した生活ができる。」と誰にでも分かりやすい教えを説きました。特に、入定までの一ヶ月余りの間に弟子に説いた最期の教え『三十一日の巻』は庶民の心を広くとらえ、富士講は大衆が生んだ宗教として不動のものとなりました。

「人はなぜ山に登るのか」と問い続けてきた著者の視点で、大衆の心の糧となった富士講の軌跡が綴られています。

大人も楽しめる 絵本の世界 第4回

『富士山にのぼる』

石川直樹作 教育画劇 2009年



「〇〇ふじ」という異名を持つ山は、全国に300以上もあるとのこと。人々が富士山を霊峰として崇拜すると同時になじみ深い存在としてきた証拠といえるでしょう。

写真家であり冒険家である石川直樹が、初めての児童書として出版したこの本は、富士山に対する親しみと、畏敬の念が感じられる写真絵本となっています。作者は10代のころから世界を回り、2001年、当時の世界最年少記録で七大陸最高峰登頂を達成。2011年には土門拳賞も受賞しました。

美しく、迫力ある写真は、この本の大きな魅力です。最初と最後の場面で、山に挑む自身の後姿の写

真を入れてあります。背中で語ることで、冬山に挑む緊迫感は増し、ただ美しいだけではない作品に仕上がっています。

富士山への思いを込めた、簡潔で飾り気のない文章は、静かで厳しい冬山の世界にあっています。実は作者は、芥川賞作家である石川淳の孫なのだそうです。

巻末には登山の装備品も詳しく紹介され、富士山の動植物や歴史に関するコラムも付いています。作者の様々な「こだわり」が、随所に感じられる一冊です。